

## 聖心

「仏の無碍智の如きは 通達して照あきる靡し

願はくば我が功慧力 此の最勝尊に等しからん

斯の願もし剋果せば 大千応に感動すべし

虚空の諸の天人 当に珍妙華を雨らすべし。

仏、阿難に告げたまはく、法蔵比丘、此の頌を説き已るに、時に応じて普地六種に震動す。天より妙華を雨らし、以つて其上に散し、自然の音楽ありて空中に讃じて言わく『決定して無上正覚を成ぜん』と、是に於て法蔵比丘、斯の如きの大願を具足し修満して、誠諦不虚なり。世間に超出して深く寂滅を樂へり。阿難、時に彼の比丘、其の仏の所、諸天、魔、梵、龍神八部、大衆の中に於て、斯の弘誓を發し、此の願を建て已りて、一向専志に妙土を莊嚴す。』(大無量寿経)

## 美しい魂

大地微塵劫の末までも、人間の心には三毒の煩惱が無くてはならない。生死海なるが故に一切衆生の心は醜い。二千五百年古も、人生は五濁悪世であり、七百年昔にも大地は生死海であり、現在も亦生死濁悪の巷である。かくして幾千万年後も、その又後も、生死海は罪悪生死の苦海に外ならない。

しかし、二千五百年の昔にも美しい魂はあった。七百年古にも尊い心臓はあった。そして現在にも高い人格はある。その如く幾千万年の後にも聖なる魂はあり得る。1 永遠に濁悪そのものである一切衆生の上に、尊き清き心を成就するものは、久遠の仏心そのものである。如来はその尊き心を必ず人生に実現したまう。さればもし人生に清き尊き魂ありとせば、それは如来の清浄なる心の廻向に外ならない。

## 法蔵菩薩

大無量寿経を説ける日に、何故に积尊は「我は久遠劫の古に法蔵菩薩であった。その時、五劫の思惟により四十八願を建立し、兆載永劫の修行によりて……言々」と説かずして、全く我ならぬものとして法蔵の本願を説き給うたのであるか。

これこそ誠に大無量寿経の特色であり、浄土の教の本質である。法蔵の名において本願を説き、阿弥陀仏の号によって名号を名告る。一仏の本願は一切仏の本願であり、一仏の心は一切仏の心である。积尊の上に生きたるものも、法蔵の本願であり、恒沙の諸仏如来、無量の菩薩の衷心に動くものも亦、その本願である。法蔵菩薩の誓願こそ、時と処を超えて一切衆生を救うて仏陀たらしめる根本原理を説けるものである。

一切衆生も亦、大無量寿経、眞実の教えを聞いて、廻心懺悔して、如来本願海に帰入する。

昨日もその本願に生ききる人を拝み、今日も亦、如来本願の威神力を人の上に明らかに拝む。尊き魂は眞実教の流れる処に誕生す。

### 誓願

光顔巍巍々として威神極りなき、世間自在王如來の正覺の光は、靜かに國王の心を照り覺まして、法藏菩薩を誕生せしめた。

「時に國王あり、仏の説法を聞きて、心に悅豫を懷き、尋ち無上正覺道意を發し、國を棄て、王を捐て行じて沙門となる。号して法藏という。」

國とは富なり、王とは權勢名利の象徴なり、國と王とを棄捐る處、無上正覺の道意顯わる。本願生る。

菩薩は必ず長脆合掌して師仏の前に全我を投げる。仏法僧の三宝の前に五体投地して絶対帰依する者あらば、悉くこれ法藏本願海の事實である。仏法はこれより外の處に成就せられず。

### 光と暗

もし我等、合掌念仏して如來に歸命すれば、心眼に映ずるものは唯全一なる如來の光明のみ。然るにもし、光を背にして人生に向えば、人生は闇に底なき極めて複雑なる差別相そのものである。

彼岸は遂に彼岸であり、此岸は永遠に此岸であるのか。光は永遠に光であり、暗は遂に暗であるのか。差別と平等、一と多、二者は遂に二者であるのか。

然るに我等は無量壽經においてその解決を見る。二つが永遠に二つなるが故に一であり、淨土は生死に非ず、それなるが故に、二をして一ならしめ、永遠に内的一なる必然交渉を持たしめるもの、即ち、法藏の本願である。

「如來は淨土に実在し、本願は人生に実現せられる。」

### 廻向顯現

真に法藏菩薩こそは、限りなき生死海を、御身自らの大慈悲の内容として荷負し給い、涅槃寂靜の光に向つて正覺成就を誓い、これによつて無限の衆生を救わんと誓いたまう。我等は四十八願の一一の上に、大悲の心を拝む。

「我超世の願を建つ 必ず無上道に至らん

斯の願満足せずば 誓いて正覺を成ぜじ、

我無量劫に於いて 大施主と為りて

普く諸の貧苦を濟はずば 誓いて正覺を成ぜじ、

我仏道を成ずるに至りて 名声十方に超えん

究竟して聞ゆる所なくば 誓いて正覺を成ぜじ。」

三度誓ひ給ひし誓願虚しからず、その名号は今我等の上に廻向せられて、信心歡喜の念仏道は成就せられてあるではないか。

法藏菩薩は、かくの如き超世無上の本願を建て、師仏世間自在王如來に向つて、つぶさに之れを演べて、その證誠を求めたまうと共に

「斯の願もし克果せば 大千心に感動すべし、

虚空の諸の天人 常に珍妙の華を雨らすべし。」

と、天地の証明を求め給うた。

美しきものは讃嘆されねばならない。天地は具体的一である。法蔵の本願の生れ  
ます処、時に大地は六種に震動し、天より妙華を雨らし、微妙の音楽自然におこり、  
空中に声あつて讃嘆して曰く「決定して必ず無上正覚を成ぜん。」と。

何たる莊重尊嚴なる証誠の声であろう。法蔵菩薩の魂は、唯一絶対なる無上道を志  
求し成就せんとする純粹なる意志である。無我清浄なる本願は、必ず実現されねばな  
らぬ。成就されねばならぬ。仏陀は決して一切の打算から生れはしない。無限の衆  
生の暗に対する大慈悲と、み法に対する智慧からのみ生れる。然り、仏陀はみ法から  
生れる。無理や邪見から生れはしない。み法は又法身ともよばれ、真如とも言われ  
る。聖なる法身以外に仏陀を誕生せしめはしない。随つて如来の正覚は自然である。  
自然の讃嘆が生れる所以である。そして仏陀は、大慈悲によつて、み法を衆生に実現  
する以外に救いを約束しない。

如来の本願がかくの如きものである以上、本願は必ず正覚を成就する。正覚を成就  
しても永久にかくの如き本願を内具する。彼は智慧なるが故に正覚成就すると共に、  
慈悲なるが故に永久に衆生を成就せんとして生死海にある。かかる弘誓願において  
外に积尊もなく三世十方恒沙の諸仏如来もなく、七高僧、親鸞聖人も亦あり得ない。  
現実の念仏行者も亦あり得ないのである。

### 誠諦不虛

「是に於いて法蔵比丘、斯の如き大願を具足し修満して、誠諦不虛なり。世間に超  
出して深く寂滅を樂へり。」

誠に「斯の如き大願」こそは、微塵の汚れなき清浄真実なる仏心の人生に於ける具  
体的表現である。無明煩惱の中にありつつ、それに染まぬ聖なる白蓮華である。

誠に世に尊きものは、清き靈性である。

世に輝くべきものは、貴き真証である。

世に広大なるものは、真実なる心性である。

而して永劫不滅なるものも亦清浄なる魂である。

世の常識は、世間の穢悪がこの尊嚴にして聖なる魂の誕生を拒むと思う。しかしそ  
うではない。聖なる心蓮華は、濁悪の泥の中にこそ開くのであった。

莊嚴華麗なる華嚴経には、仏陀の広大なる相は説かれても、悲痛なる生死海の描写  
がない。法華経は、妙法蓮華の尊高は説かれても、その咲く泥が出てない。涅槃  
経には、五逆、謗法、聞提、難治の三病の痛ましきは現れていても、如来との交渉が  
審かでない。独り大無量寿経において、光と暗、如来と衆生との内的交渉、即ち仏陀  
の本願が詳説されてある。

法蔵菩薩とは、実に悲痛なる泥土の中に顕現する至高至純最尊最勝なる心蓮華の全  
き表現である。

「かくの如き大願を具足し修満して誠諦不虛なり。」

かかる最尊最勝なる願に欠くる処なきが故に具足と言われ、修飾満足と、かぎり満  
されるが故に修満と言われる。「誠諦不虛なり。」、誠諦とは「まこと」である。誠諦を

全うじて虚しからず。如来の誓願をにおいて、誠諦はあり得ない。誠諦虚しきものは、魔であり、外道であり、凡夫である。仏道とは実に誠諦不虛の大道である。

#### 深楽寂滅

「世間に超出して深く寂滅を樂へり。」

凡夫は誠諦なく唯欲心のみありて、世間に執着せるものである。世間の騒音の中に欲の幻を追つて、内より外に、本より末に、真実より虚偽に、本性より狂態に、故郷より旅路に、寂靜より生死動乱へと流転せるものである。

「世間に超出して、深く寂滅を樂へり。」

「寂滅を樂う」とは、誠に菩薩の願意である。世間憤鬧の法を遠離して、その縛着を越え、直ちに寂滅を樂つて、大菩提を成就せんとするは、菩薩の真証である。

地獄、餓鬼、畜生等の惡趣に強く根を下す者は、煩惱成就の凡夫である。五欲の根のはびこるままでは浄土には到り得ない。生死の海に碇を下したままでは船は進まない。足は自力の荒縄で縛られ、手は疑惑の鎖でいましめられては、彼岸に行歩することは出来ない。かかる衆生も名号六字の利劍によつて迷路を智斷されることによつて、彼岸への大菩提心を成就されるのである。大菩提心こそは涅槃寂滅に通ふ心である。

#### 智斷

名号の智斷によつて、そこに成就するものは信心の智慧である。「願力不思議の信心は大菩提心なりければ、天地にみつる惡鬼神みなことごとくおそるなり。」と言われ「智慧の念仏うることは法蔵願力のなせるなり。」と嘆ぜられる所以である。

信心の智慧は如来の絶対価値に開かれたる眼であると共に、煩惱を煩惱と深信する眼である。

されば聖人は「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごととたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします。」と告白せられた。これ如来寂滅の世界を樂うと共に、火宅無常の世界、煩惱具足の現実を遠離して、そのそらごととたわごとを信知せる智慧の世界の開顯である。

信心の淨慧なくしては、十惡五逆謗法闡提の重病難治の現実を知ることが出来ない。これを知らずしては如来の願意を領解することは出来ない。随つてそこには、真の念仏三昧の世界は成就しない。故に念仏三昧の人は、五逆謗法の機を深信自覺することによつて念仏の尊高を領受するのである。

誠に我如来に生きるに非ず、如衆來つて撰取し、その智慧光によつて衆生の疑惑を智斷し給うのである。寂照の光、靜に念仏と共に訪れ給うのである。

#### 一向專念

「阿難、時に彼の比丘、その仏の所、諸天、魔、梵、龍神八部、大衆の中に於いて、斯の弘誓を發し、此の願を建て已りて、一向專志に妙土を莊嚴す。」



貪欲は永遠に天地万物と対立し、一切衆生と水油相抽象してをる。然るに一切を一如に寂滅せしむる如来の本願は、一切と具体全一なるが故に、いささかの対立なく、諸天善神はもちろん、大魔王に至るまでその本願開顕の梵筵に集合して、菩薩を守護讃嘆すると共に、その法を聴聞してやがて大菩提を得んとするのである。誠に貪欲我慢の前には菩薩善知識までが敵となるであろう。大慈悲の前には大魔王までその眷族となるであろう。

「此の願を建て已りて、一向専志に妙土を莊嚴す。」

法蔵菩薩は、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の無量の徳行を積植するに「一向専志」を以て一貫せられるのである。

憶うに、衆生貪欲の心は、念々に変化し、千々に砕けて、一心一向たり得ざるものであり、建立常然を得ざるものである。

然るに浄土の教えにおいては、特に一心の相統を以て最重要視せられる。天親菩薩は、「世尊我一心」と告白せられ、曇鸞大師は、不如実の信心を挙げて、信心不淳、信心不一、信心不相統の三不信を説かれ、善導大師は「一心専念、弥陀名号」と衆生往生の正定業は一心専念の念仏行にあることを教えたまひ、我が聖人は「真実の一心」と言い、「金剛の真心」と名づけられた。これ皆、終始一貫相統の一心一行を示されたものである。法蔵菩薩にあつては、「一向専志」と言われ、行者にあつては「一心専念」又は「一心一向」と言われる。我等はここにも願と信との不二一体を領解せしめられる。美しい心、それは純粹持續されることによつてのみ意味を持つのである。真実は必ず一貫する。

### 菩提心

人皆に樂しむ所がある。その樂しむ処に人はその全力を傾倒する。されば人格価値の相違は、その樂ふ所のものの価値によつて決定する。釈尊以下親鸞聖人の偉大は唯一絶対の大行に全我を捧げて生きられたが故である。

曇鸞大師は、信心即ち菩提心を、願作仏心なりと言ひ、度衆生心なりと釈して、自身住持の樂を求めざる心と明示された。唯一最高なる如来本願に全我を投托して生きることは、本仏の願意を領解するが故に、利己的な樂を求める心を捨てて、自ら仏たらんとする願作仏心と、一切衆生を仏たらしめんとする度衆生心との渾然一体なる菩提心に生かされることである。

而してかかる信心は到底煩惱の發起するものではなく、最高最勝なる如来の本願より廻向せられるものなるが故に、称仏六字の衆生は、願生浄土のままが莊嚴浄土の行者となるのである。

我等は多くの目的を人生に持つてはならぬ。唯一絶対なる大行に生かされることを以て出世の本懐とせなければならぬ。

「一向専志」とは法蔵菩薩の本願を語るものではある。しかし法蔵の本願を語る語なるが故に、我等は念仏行の上に、この金剛の真心を領解するのである。

先にも述ぶるが如く、三毒煩惱は、歴縁対境によつて、刹那々に千変万化して一心一向たり得ないものである。然るに一心専念の念仏行を執持し得るのは、全く如来願心の然らしむるが為である。

念仏行に一心一向たり得たる時、我等は特に法蔵の弘誓を身を以つて体感するものでもある。その時十方恒沙の諸仏如来の護念証誠は、衆生をして大菩提において不退転を得せしめたまうことを知るのである。

「声聞或は菩薩、能く聖心を究むるなし。如来の智慧海は、深広にして涯底なし、二乗の測る所に非ず、唯仏のみ独り明了せり。」

如来の智慧海を測り知ることには出来ない。

而して衆生の清浄願往生心は微細ではある。

しかし底なき聖心の泉は、我等の現実に流れ出で給うてある。

謹みて精進し、この聖なるみ心に生かされる幸を感謝すべきである。